

蹄の痕(五)

○逗子黒田より東京久米宛

(明治三十一年五月八日)

今度とはとう／＼行そこなつて實に残念だつた昨日は其爲めに何となく不愉快に暮らした定めて面白い旅をやつたゞらう併し月の出を見る事丈は出来なかつたに違ひない昨夜はかなりおそく月が出たから

今日の雨には何處で出逢つたゞらう是で又一つ出来事がふえて却て紀念になる

何か知らん拵へやうと思つて氣計りあせつて居るが未だ何も思付かない

昨日は氣をませらかせる爲に杉から借りたコラン先生の編物をして居る少女の圖を寫し始めたがなか／＼むつかしい兎ても二日や三日では色の調子丈でも出来ないと思ふ

○東京久米より逗子黒田宛

(五月九日夕)

旅は鳥渡面白くやつてのけたよ其前に大分連中を多勢にしたいと思つて方々誘つたが菊地は病氣で行けず合田は土曜の朝用があるからだめだとの事吉岡も晝までは會社から離れられぬといふ

土曜日はなんだか曖昧な天氣だつたが約束だから十二時の發車に出かけて見ると汽車の中には岩村と小代がはいつて居た首尾よく東京を離れ品川では若しや手前の影が見えはせぬかと窓から首を長くのばして探したが居らずそれで新宿では誰か網にかゝるかと思ひ停車場で車の來るのを待つ内ズット端の方に佐野が同じく待つて居るの

を發見し是で連中集つたといふ譯でやがて來る汽車に乗つた

立川まで一ト走りで茲で正宗の二合入徳利を一本岩村が買ひ携帶で例の輕便鐵道に乗込んだ何だ人を馬鹿にした汽車だナア麥畑の中を押分けたやうにしてガシヤ／＼と云はして行く處は鐵道とは思へないや四時比になつてやつと青梅についた八王子なんかより鳥渡オツな處だナ若狭屋といふ當地第一等の料理屋に上り喰ひ物を云ひつけた鯉こくの外みんな東京から來た肴計りで一向興がない階子段の側に左の張紙あり

壹等藝妓 一本拾貳錢五厘

二等藝妓 一本拾錢

三等藝妓 一本七錢五厘

一時間の玉二本とす云々

下女のお福曰此地に藝者は十六人居ります御祝儀は五十錢ですとやがて持て來たのは生玉子よ地玉だと保證したが何だか變にくさい様だつた夫れから肴肴茶碗茶碗の中には蝦の腐つたのが入つて居る佐野はトートそれを呑込んでしまつたエビスビールで臭ひをごまかしどうかこうか腹は出來たので靴と足袋は預けて置いて草鞋仕度をして立出でたのは五時半頃なり

多摩川の岸の崖の處に出て大分陽氣になり坂を下つて多摩川の板橋を渡る此邊の景色は鳥渡話せる夫から先は道中になり佐野の寫真器械は人間持ちで凡壹里半計歩くと杉の並木に鳥居のある處に出た茲に棒杭あり

側の茶屋に様子を聞くと新道は近いがあぶないからよさしやいといふまぎれ路があるかと聞けばナニ大きな路さ

へ取つて行けば間違ひないといった何しろ出来事のあるのを當てにする旅なれば此新道にはいると一軒家の婆アありこれに尋ると矢張此道はやめろといふナゼだといふときみしいからだと答ふ○泥棒が出るか○ソナものは居ない○喰が居るか○居ない○化物が出るか○出ない○狸が出るか○狸位出ませふといったから此婆を御嶽の狸婆と名附けたりハルハウレエシヤで山に登りかけた時計を見ると丁度七時なり

一ト息の間森の中を登りつめると東南の方を見下す *Baldern* もいふべき處に出た茲には小さな廟があつて崖の處は欄杆がついて居ること日は全く暮れたがまだボンヤリした餘光で路丈は分る此森の中を登つてしまふといふと樹木のない山の頂上に出て此處に山賊の住家ともいふ様な家が二軒あつて人は居らぬ鳥渡薄氣味悪い心地がして夫から大分歩いた歩いて行く程道は狭く日は暗くなるナンデ月月の出るのは八時比だから是から一時間は暗い處を歩く決心さ路は *Engels* の頂上に少し似た様な處があるがアンナに山の幅が廣くないから兩方共谷で馬の脊中の様な處がある

こう云ふ處に出るたんびに此山を廻はつたら向に人里が見えるかといふ氣計するが中々見えず三四遍草の中に窺ころんだ足が痛むにつけて不平心が生じてうらまれるは案内者を氣取つて居る岩村水計だ其中に星の光がボツ／＼見えて来て後ろの方の空がボンヤリ明るくなつて來たモーゑめたゾ月だ／＼といつて少し勇氣が出て大分進んだ其内又一つの富士の山見た様な處を一トまわりして馬の脊中に出ると右の谷間に遠く燈火が見えたので一同鬨の聲を擧げた茲からモー一ト息で御嶽の宮の下で人家が十二三軒塊つて居る其一番先の大きな家が須崎宮治といふ神主で岩村が泊つた家入り口は大きな門にシメ飾りがして兩方に高張提灯をとぼしてある是は我々を迎へ

る爲につけたのではない丁度明日は祭禮といふので講中の參詣人など大分客がある様子併し我々は二階の上等の室に案内され茲で一ト安心したのは九時半過

夫れから二膳附の御馳走で十二時過になつてやつと飯が出て寝たのは一時過隨分此山の中に此大きな家で蒲團も清潔なのを並べる絹の寝巻に新らしい浴衣が四枚づゝ出るなんか鳥渡意外な氣がするよ先是までが面白かつた處翌日は祭で大賑ひうどん鰻頭あんころ餅色々な店が出る

朝飯後晝まで七代の瀧といふを見物する瀧の下から上に登る道に鐵の鎖なんかゞブラ下つてそれを傳たつて昇る處は鳥渡氣に入つた外は先づ日光流の景色計

晝後になり山を下る今度は本道一里の間下り坂是は昨夜の道より餘程急だ麓に來た比一ト雨やつて來たが間もなく止み是からの道中はなんだか義務的で一向面白味はなく唯ウン／＼痛さをこらへて行く計り是から多摩川の兩岸の街道は矢張 LeRudin から Gérardmer 行く道に少し似た様な景色途中皆くたびれが出て一向ちようだんも出ず全速力で進んで行くダガ中々昨日の分れ道まで出て來ないイヤといふ程歩いた處である茶屋の前に二臺の人力があるそこでオレと小代と二人謀反を企て此人力をつかまへて青梅へ走つてしまつたが佐野と岩村も中々感心な奴オレなんかが着いて十分計立つとやつて來やがつて大得意の体だつた

青梅を五時間半の終列車で出で又ガシヤ／＼で歸つてしまつた

今日は是から昨日の記念會を開く積り○今度は筑波山に二三日かゝつて登ろうという Projé があるが其時は是非手前も來い何しろ今度は時間が少ない爲めに興も少なかつた

○逗子黒田より東京久米宛

(五月十五日夜)

此前の金曜に學校へ行た時も午後内の方に用が出来て亦手前の處へ話に行く事が出来なかつた○停車場への途中芝口を通つていつか白馬會の紫のリュバンを拵へさせた勳章屋の前を通つたから一寸立ち寄りて今度の勳章の圖を見て見せて斯様なのが出来るかと尋ねたら出来るよと云たよんなら今日は少し急いで居るから其内に能く形などを極めて又来る其時には直段の積りをやつて呉れ数は凡二十五個なのだ云ひ残して置たなんでも七寶で馬の首を入れる事はむつかしいやうに云て居たが五點の色を入れる事は出来る又パレットの形を馬の蹄鐵かと思ひたがるやうだつたから蹄鐵の形にして仕舞はないやうに注文の時には能く注意してやらなければならぬサテいよ／＼七寶で白く馬の首を現はす事が出来ないよと云ふ事になれば一寸又面倒だ○例の裸體畫の事が又候やかましくなつて來たと見えて新著月刊の東華堂が今日手紙を呉れて此の二十五日に裁判があると云てよこした

もう此處には蚊が出るやうになつた又二三日前に畠の中で一枚かいたらパレットを持つて居る方の手を十ヶ所ばかりブヨに刺されたゞが今は草原の色などがなかくいゝ昨日は湯淺と葉山の濱邊へ出かけて二時間も暑い思をしてまづいのが一枚塗れたがこいつは到底つぶしものだ又今借りて居る家の臺所の圖を此頃二十五號に始めた

○逗子黒田より東京久米宛

(五月二十二日)

此間からの話の白馬會のアトリエの事に就て學校で湯淺に逢つたを幸ひ和田などへも相談して呉れる様に頼んで置たら昨夜湯淺が此處に來て和田、丹羽林、等と相談の結果引受けてやつて見るとの事だから先づ生徒を菊地の處から移して月謝を取る(菊地の處では月に七十錢だとの事)月謝丈では無論費用の半分にもならないから其不足

の分は湯、和等で頭割にして負擔する

○逗子黒田より東京久米宛

(六月二十四日)

一兩日漸く天氣が好くなつたので景氣づき四十號を一枚今日から始めた。Sjetteは田舎娘が草原にねこんろでぐみの實をちぎつて居る處だ甘くかければいゝが

○逗子黒田より片瀬秋元長太郎方小代爲重宛端書

(八月一日)

僕は明日か明後日には引上る積りだから君は三日に乗り込む様にして呉れ○今日は此處も風が無いから其處の暑さは思ひやれる

○逗子小代より片瀬秋元方久米宛端書

(八月五日)

一軒チンと構た處はなか／＼わるくない風はよく通して水浴後は、障子を締める位で實に申分なし一週間も経たらやつて来るわけにゆかぬか何不足はないと思ふ小松原などに随分書く處もある様だ

○日光萩垣面高照庵黒田より片瀬久米宛

(八月六日夕)

いよ／＼日光の住人と爲つた今度磯谷を引張て來たのと五百城の世話とで萬事都合よく運び大きなお寺で畫をかく

サテ小代はどうしたらう三日までは逗子に居て待て居たが來なかつたから仕方なく夕の六時の汽車で立てしまつた其翌日位は引越したかしらん

成る程日光は雷の名所だ今日もたつた今までは極いゝ天氣だつたがゴロ／＼始めて忽ち曇つて來た今に夕立が來

るだらう○涼さは晝間も思はないが夜蚊が出ないと冬被るやうな夜具で寝るので分る又眞晝間でもムツとするやうな暑さはしない○蟬とひぐらしの聲は盛だ

オレのアトリエと極めたお寺は興雲律院と云ふ寺で随分宏大な建物だが其廣い所に和尚と小僧と大小しめてたつた四人で先づ明き寺同然だ今日始めてお座敷を拜觀に及んだが本尊の阿彌陀様其他二二の佛躰皆名作といふのはなさそうだ庫裡に大な大黒様があるが其丈は一寸面白い氣味の悪いやうに思はせるのは本堂の一部の天井板に何だか油じみた様でいやに赤つちやられたものが見えるがこれは血のついた足跡だと云つて居るどうだい

○京都堀江純吉と日光黒田宛

(八月九日)

裸躰畫事件大坂控訴院に於て昨日無罪の言渡しを受けたり乍憚御安神被下度候頓首

『光風』二三 明治三九年六月